
Flowline flower 3

片桐天音

書名 flowline flower 3
発行日 2019/05/06
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 変態美少女ふいろそふい。 出版部
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

もくじ

甘い煙に誘われて 2

表紙デザイン — 野沢菜 / 片桐天音

表紙イラストを除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

To the extent possible under law, 野沢菜 and 片桐天音 have waived all copyright and related or neighboring rights to cover image. This work is published from: 日本.

:comet: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/2604.svg> and
:cherry_blossom: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/1f338.svg>
emojis used in cover image are licensed under a CC BY 4.0 by
Twitter, Inc and other contributors.

甘い煙に誘われて 2

片桐天音 (@amane_katagiri)

nickname 2

まりっぺのことは、もう忘れたつもりでいた。突然私の前から姿を消した彼女のことを、いつまでも追いつけるわけにはいかなかったから。

あのとき、まりっぺはどうして私にさよならを言わなかったんだろう。私のことを嫌いになったんだろうか。

まりっぺは、最後に私をCと呼んでくれた。私が赤沢さんをまりっぺと呼ぶように、私をCと呼んでくれた。だから、半ば強引に参加させられたこの同窓会で、後ろから懐かしいあの声で「C」と呼ばれたとき、私の心は確かに四年前に戻っていた。

「あら、C、久しぶりね」

「……まりっぺ。どうしてここに？」

secret 2

まりっぺの部屋は、駅から十分ほどのアパートの三階にあった。振り向くと、細い道を挟んで背の低い一戸建てやアパートがひしめき合っていて、一步踏み込むだけ

で誰かの生活とぶつかってしまうような狭苦しい気分になる。

もう辺りはすっかり暗くなっていたけど、歩いていてもすれ違うのは残業帰りのサラリーマンくらいしかない。窓から漏れる黄色い光と、睨むように冷たく光る街灯が、疲れた顔を上からぼんやりと照らしていた。

この辺りはあんまり治安が良くないと聞いていたけど、今のところは閑静な住宅街に見える。

「そう？ 住んでみれば、そんなに悪くないわよ。狭いのは慣れてるし」

「でも、暗くて危ないよ」

街灯はそれなりに整備されているとはいえ、建物と建物の間を縫うような細い道はやっぱり見通しが悪い。この川沿いの住宅街にたどり着くまで何度か路地を通り抜けてきたけど、まりっぺみたいな若くて綺麗な女の子が通り抜けるには、少々おぼつかない箇所もあった。

「あら、普段はちゃんと暗い道を避けて帰ってるわよ。でも今日は、特別だから」

「特別？」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
お久しぶりです。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです、お元気ですか？」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです、お元気ですか？」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです、お元気ですか？」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです、お元気ですか？」

おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？
おはようございます。昨日は、お久しぶりです。お元気ですか？

「お久しぶりです、お元気ですか？」

または、<https://forms.gle/d8zfmGApGj9jZGXA>



ここから「flowline flower」の感想をお聞かせください！

りっぺの横に収まるように滑り込むと、程なくして重たい音と共にドアが開いた。

「少し散らかってるけど、適当にくつろいでちょうだい」靴を脱ぐ。アパートの古びた外見とは裏腹に、1Kの小さな部屋はまりっぺらしさで埋め尽くされていた。

フロリングの上には左からベッド、ソファ、ガラステーブル、そして棚との上に小さなテレビ。部屋の隅には大きな白いクローゼットと姿見が置かれていて、中にたくさんのドレスが入っていることが窺える。奥にはベランダに続く掃き出し窓があり、今はそこにジャガード調の柄がきらめくピンクの遮光カーテンが引かれていた。

棚やベッドに置かれたたくさんのぬいぐるみのせいで、散らかったような印象も受けるけど、淡い色で統一された室内はまさにまりっぺのお城という感じだ。そんなお姫様の部屋の雰囲気を上上げるように、ローズアロマがほんのり香っている。

でも、その優しいフロラルの香りの後ろに、隠しきれないタバコの匂いがかすかに残っているのを私は見逃さなかった。床に、ソファに、壁紙に、かつてまりっぺが

くゆらせていたような甘い匂いのものじゃなくて、ツンとした嫌な刺激臭を感じる。よく見ると、煙が染みているせいか、淡い花柄の壁紙の端が少しくすんで生活感を残していた。

別に、まりっぺがどんなタバコを吸っていたようと私は気にしない。むしろ、新しいまりっぺの匂いを歓迎してしまうだろう。問題は、それが本当に「まりっぺの匂い」なのかということだ。まりっぺに感じていた男の影の正体を、私は結局確かめられずにいたから。

そして、まりっぺについても一つ気になることがあった。それは、彼女の舌にはまったピアスのことだ。食事の時から気になっていたけど、何度かその瞬間を見ているうちに確信した。笑うたびにちらりと覗く銀色の丸みは、かつてのまりっぺからは見つけられない明らかに異質な存在だった。ほのかに残るタバコの匂いが妙に頭に染み付いて、その穴さえも誰かが作った傷のように思えてくる。

まりっぺに刻まれている誰かの跡が、可愛らしく飾られた部屋や身体の中に隠れているのが分かる。私がまりっぺの恋人だったなら、口をこじ開けてでも確かめること

んな夜遅くまで残業か、と思いつながら声のトーンを落として通り過ぎるのを待っていると、まりっぺは逆にその足音に反応するように立ち上がった。

「あら、来たみたい。少し待ってて」

そう言って、まりっぺがチャイムも鳴らないうちに玄関に向かう。しかし、こんな時間に来るのは宅配便でも訪問販売でもない。私が「誰か来るの?」と尋ねると、まりっぺは振り向いてこう答えた。

「A子よ。後で紹介するわ」

*

ずかすかと上がり込んできた女のことを、まりっぺは確かに「A子」と呼んだ。

「よっ、タバコ吸いに来たよ。……あれ? 誰、それ」

「友達よ、友達。来るなら先に言っておね」

A子は喫煙所にでも来たような口ぶりで、まりっぺの部屋に上がり込んだ。手に持っているのはフィルムに包まれた新品のタバコだろう。深紅のパッケージの表面にはホログラムが貼られていて、動くたびに蛍光灯を反射

して安っぽい黄色のきらめきを放っている。

A子。その名前には聞き覚えがあった。いや、忘れるわけがない。まりっぺと私の大事な時間を邪魔したA子。私からまりっぺを奪っていったA子。私から「特別」を奪っていったA子。

四年前のあの瞬間が、今日の前にもまた現れようとしていた。

本当なら、まりっぺにA子との関係をすぐにでも問いただしたかったけど、今はまだその時じゃない。A子だって、思いがけない先客の私を見て何か思うところがあるだろう。もしかしたら、向こうから何か仕掛けてくるかもしれないし。

A子が靴を脱ぎながら、ピンクのスケートボードをドアに立てかける。まさか、ここまでスケボーで来たんだろうか。ロングの茶色いくせ毛を翻し、デニムと大きめのブルゾンで狭い道を駆け抜けるA子は、いかにもストリート系という感じがする。

やっぱり、まりっぺにはそんな子似合わない。

「ふーん。でも、マリーに友達なんていたっけ?」

傷を見て、勝手に涙があふれてくる。

私は声に詰まって何も言えずにただ頷くと、ところがまりっぺは、不満げな顔で私に向き直った。

「何言ってるの? 違うわよ、私は誰かに身体を傷つけさせたりしないわ」

「で、でも青山さんは……」

「私のことは私が決めるって言ったでしょ? むしろAは反対してたわよ。あの子、すごく勝手なんだから」

まりっぺのピアスは、A子が開けたものじゃない? じゃあ、まりっぺが自分で決めたの? そうだとしたら、私は大きな勘違いをしていたらしい。舌にはまった丸い銀色が急に美しい輝きに思えてきて、私はその口元から目が離せなくなっていた。

「だってあの子、太ももにタトゥーがあるのよ? だったらピアスクらい、別にいいじゃない。温泉だって入れるんだし。そう思わない? 舌が痛いって言うけど、そんなの別に——」

「ま、待ってよまりっぺ! じゃあ、そのピアスは自分で開けたってこと?」

A子の不満をつらつらと並べるまりっぺの言葉を遮ると、彼女はきよんとした顔で私を見つめる。

「だから、そう言ってるじゃない。私は誰のものにもならないわ。Aのことは好きだけど……C子、あなたのことだって、好きだもの」

「ま、まりっぺ……やめてよ、そんなの……」

嬉しいはずの告白に、私は何故か拒否感を覚えていた。私はもうまりっぺを諦めると決めていたはずなのに、まりっぺが私に希望という毒を注入していく。私は誰のものにもならない。あなたが好き。そう言っただけのまりっぺの意志の強い瞳が、また私の心を捉えて離さなくなる。「だって、まりっぺはA子と付き合ってる、だから私はもうまりっぺを諦めるしかないんだよ?」

「でも私、Cのことが好きだわ。Aのことも、Cのことも」まりっぺとの別れを決めたはずなのに、彼女に好き、と言われるたびに顔が熱くなるのを止められない。それに、いつの間にかローズの甘ったるい香りばかりが私の鼻をくすぐっていた。

A子のタバコ。A子がまりっぺを汚したタバコ。ツン

るだけの仲間なんて、まりっぺにも妙な友人がいるものだ。

「二人とも、なんだか気が合いそうね」

まりっぺは私とA子を交互に眺めながら、そう言って少し笑った。私には、どうにもそうは思えなかったけど。少なくとも、マリーだなんてダサイあだ名を使う女と一緒ににはされたくなかった。

*

自己紹介もそこそこに、まりっぺは「着替えてくるわ」と告げてバスルームに消えていった。残されたのは、まりっぺの身体を濡らすしっとりとしたシャワーの音と、互いの名前くらいしか知らない他人同然の二人だけだ。

「ソファ、座りますか？」

「あー、別にいいよ。床の方が落ち着くし」

ガラステーブルに頬杖をつくA子は、ラグの端にあぐらをかいて私に向かい合うように座っている。左手で画面をスクロールさせながらぼんやりとした視線でスマートフォンを眺めるその姿は、なぜか前に見たことがあるような気がした。

沈黙が流れる。テレビを点けておけばよかった。

A子は私に興味がないらしい。でも、私はA子のことをもっと知る必要があるのだ。A子にとってはSNSでもチェックしていれば過ぎ去るような暇な時間かもしれないけど、私にとっては彼女のことは見定めるための重要な時間だった。

手持ち無沙汰そうにもてあそぶタバコの箱が、いちいち光を反射してきらめいている。しばらくすると、A子はスマートフォンを捨てるように床に置き、タバコのフィルムに手を掛けた。

ぱちぱちと爪でフィルムを擦る音を響かせているところを見ると、どうやら開封テープの加工が甘かったらしい。A子は何度か包装をぐるりと見回した後、私の名前を呼んで枕元のペン立てを指差した。

「開かねーな。C子、そこにかみそり置いてない？」

「あ、はい……これですかね」

ペン立てにかみそりがあるのか、と思いつながら赤紫の薄い柄を引き出すと、乳白色のカバーに包まれた刃が現れる。A子は短く「ん」と答えると、受け取ったかみそり

「おかえりなさい、C」

「あ……う、うん。ただいま」

まりっぺはもう、バスローブからレースをあしらった柔らかなボアのピジャマに着替え終わっていた。姿見の前で全身がピンク色のもこもこで包まれた自分の姿を確認しながら、時折裾をくいと少し引っ張ってフリルの形を整えている。

可愛いなと思うと同時に、まりっぺはもうA子のものなのか、とぼんやり考えていた。

「A、あなたに挨拶もしないまま帰っちゃったわ。あら、それ……」

そう言いながら、まりっぺが私の右手を指差す。その先に持っているのは、さっきA子がくれたローズフレーパーの電子タバコだ。返そうと思っていたのに、まるで嵐のようなやつだ。

まりっぺは一瞬怪訝な表情をしてから、すぐに嬉しそうに笑った。

「Aったら、よっぽどCのことが気に入ったのね」

A子が私のことを気に入った？ そんなふうには見え

なかったけど。少なくとも私は仲良くするつもりはなかったし、A子だってそれには気付いていただろうに。

そんなことを考えながらソファに掛けると、まりっぺも私の隣に座った。

「じゃあ今日は、私もローズのタバコにしようかしら」

そう言うと、まりっぺは枕元から細長いピンクの箱を取り出した。そして、濃いピンク色の紙で巻かれたおしやれなタバコを引き出す。ホログラムが巻かれた箱のきらめきはA子のと似ているけど、心なしかより上品な輝きに見える。

部屋で吸ってもいいのと尋ねると、今日は特別よ、と言って笑った。

「A、たまに来るのよ。寂しいのよね、きつと」

まりっぺの口元からふわり、と濃厚なローズの香りが漂う。でもその後ろには、確かにタバコの香りが潜んでいた。その甘い香りとは正反対のツンとした刺激を意識すると、嫌でもA子のことを思い出してしまふ。

いい匂いのはずなのに、その後ろに隠れる影ばかりが気になっていた。

「あの、友達なら友達って言うって下さいよ。もう一回訊きます。まりっぺとは、どういう関係なんですか？」

全く同じ質問に、A子がとうとう大きな溜息を吐く。苛立った彼女の表情が徐々に怒りを帯びていった。射るような目つきは荒っぽくて、繊細さの欠片も感じられなかったけど、その力強さはまりっぺと少しだけ似ていた。

「だから、なんだっていいじゃん。友達かどうかそんなに気になるのかよ」

「気になりますよ。だって、私は——」

「……じゃあさ、恋人だったらどうすんの？」

恋人？ 私の言葉を遮るように、A子がぼつりと呟いた。まるで取り留めのない雑談のように投げかけられた言葉が、私の心に大きな波紋を広げていく。

A子はすこぶる退屈だとも言うように、指に持ったタバコをテーブルに放り投げて背伸びするように身体をのけぞらせた。そのゆったりとした動きを見ると、余裕がないのは私だけのよう思えてくる。

つまり、まるでこの女が本当にまりっぺの恋人で、その事実を知らない私だけが一人で大騒ぎしているような……

そんなわけなのに。そんな——

「——こ、恋人なんて、そんなわけない！」

駆け巡る疑念に耐えきれずに、私は思わず立ち上がった。彼女の罠にハマったのだと気付いた時にはもう遅い。私を見上げて鼻で笑うA子を見て、私は負けた、と思った。もう目の前には、冷静なA子と感情的な私が向き合う滑稽な構図ができあがっていた。

「なんでだよ。C子だって、マリーが好きでここに来たんだろ？ 私たちが付き合ってたっておかしくないじゃん」

まるで私の気持ちを知っているかのような物言いだ。そうやって、言い当てるふりをして動揺を誘っているのは分かっていたけど、一度崩れた態勢を整えるのは難しい。私の中の疑心暗鬼じみた想像が広がって、少しずつA子のペースに巻き込まれているのが分かった。

「おかしいですよ！　だって、そんなの……付き合ってるんですか？　好き、なんですか？　まりっぺのこと」

「好きだよ。好きだけど、だからなんなの？」

付き合ってるのか。そんなことを訊いたって、答えてくれるわけがないのは分かっていた。

に上から目線で絡んでくるやつだって、真っ先に絶交するだろうから。

「C子は、タバコ吸わないの？」

「はい、吸わないですね。匂いが気になるので」

そう皮肉で返したけど、A子は「別に気にする必要なんてなくない？」と、伝わっているのか無視しているのか分からないような返事で私をいなした。

「じゃあ、これ。やるよ」

A子を取り出したのは、紫色をした丸い鉛筆のような細長い筒だった。手に取ると少し重たくて、表面のさらさらとしたラベル越しに金属の冷たい感じが伝わってくる。これは何かと尋ねると、A子は電子タバコだと言った。

「えっと、だから私、タバコはちょっと……」

「何も入ってないって。日本のだから。風味だけ」

A子はほら、と言ってその「電子タバコ」を目の前で吸ってみせた。A子が吸うのに合わせて先端が赤く光って、ふっと消える。

今度はA子が吐くのに合わせて甘ったるい香りが駆け抜けて、それから元のタバコの匂いで茶色く塗りつぶさ

れていく。喫煙者が吸ってみせたって「何に入っていない」

証明にはならないだろうけど、少なくとも今すぐ倒れるような危険な成分は入っていないようだ。

「これ、どう吸うんですか？」

「どう、って……吸うの、穴から。口で」

暗くて分からなかったけど、よく見ると十五センチほどの筒の片方に小さな穴が開いている。これが吸い口らしい。妙な感じだ。

ふーん、と思いつながら吸い口をくわえて軽く息を吸い込むと、なるほど、バラの合成香料のような安っぽい甘さが口の中に広がっていく。少し煙たいけど、A子の吸うタバコのような刺激臭はない。さらに吸うと、先端がゆらゆらと赤く光っているのが分かった。

もやもやとした感じが気持ちいい。なるほど、タバコみたいに光るのかと思いつながら先端を見つめているうちに、何だか気分が良くなっていく。

さらに強く肺まで吸い込むうちに、いきなり何かパチッと弾ける音がした。

「ぐ、ぐはっ……げほっ！　げほ、げほっ……び、びっく

ない。偶然だつてありえるし……自分の中でそんな言い訳をぐるぐると巡らせていたせいで、私の「切り札」がもはや切り札でないことに気付くまで、少し時間がかかった。「マリーがダサイ携帯灰皿を持ってるから、彼氏がいるって思ったの？ 残念だけど、あいつにタバコを覚えさせたのは私、その携帯灰皿の彼氏は、私なんだよ」

けらけらと楽しそうに笑うA子。それは勝利宣言だった。随分と無骨な携帯灰皿だから、センスのない男がプレゼントしたものとばかり思っていたけど、まさかセンスのない女だったなんて！

「そっか、タバコの見張り役って、C子のことだったのか。マリーが吸ってたタバコって、これだろ？」

そう言うとA子はテレビの横のコスメ収納を漁り始め、その引き出しの二段目からストロベリーが描かれた白い箱を取り出した。箱はもう開封されていて、開けると既に何本か吸われているのが分かる。A子はその中から一本を取り出して、私に手渡した。

葉の間にほのかに香る甘酸っぱい香り。普通のタバコよりもきゅっと細く締まった芯。確かにこれは、私がま

りっぺの「非行」に付き合っていた頃に吸っていたものだ。まりっぺはこの箱から何本か取り上げて、薔薇の刺繍を縫い付けた水色のケースに入れていたのだ。

「ストロベリーの香りがする輸入タバコだよ。ウチで特別に仕入れてる」

A子がストロベリーの箱からもう一本引き出した。火を着けて、吸って、息を吐く。テーブルからソファに広がっていくストロベリーの香りは、確かにまりっぺが私にくれたあの香りだ。私の中にじわじわと染み込む煙の味を感じながら、まりっぺが「特別」なタバコだと言っていたのを思い出していた。

遠い目をしたまりっぺが、上を向いてふわりと煙を吐き出す。あの光景が、眼前によみがえってくる気がした。「あっはは、まっず！ やっぱ甘いのは不味いわ。笑えてくるほど不味い」

と、まるで目の前にまりっぺがいるようなその不思議な感覚は、A子の下品な笑い声で簡単に破られる。でもたまに吸いたくなるんだよね、なんて機嫌よさそうに笑いかけるA子は、そんな私の落胆を察するつもりもない。

部屋を何度もまりっぺの香りですっばいにして、私の自傷じみた妄想だけをいたずらに煽っていた。

A子の煙に染められたまりっぺ。まりっぺの服が、肌が、目が、少しずつつくすんでいく想像が頭を離れない。

「も、もしかして——」

「ちょっと、A！ 部屋では吸わないでって言ってるでしょ……って、なんでそれ吸ってるのよ」

もしかして、まりっぺの舌ピアスもA子が開けたの？ と尋ねるより先に、頭にタオルを巻いたバスローブ姿のまりっぺが私たちの会話を遮った。

お風呂上がりの上気した肌に、むわりとした熱気がまわりついて部屋に入ってくる。しっとりとしたシャンブーの香りが、ストロベリーの煙と混ざりあって、とろけるような甘酸っぱい香り変わった。

「あー、ごめんごめん。C子が気になるって言うからさ」

「そ。なら、まあいいけど。部屋ではやめてよね」

A子の適当な言い訳に、まりっぺはいったんその怒りを収めてみせた。そして、A子に聞こえよがしの小声で私に告げる。

「C、ごめんね。部屋がタバコ臭いの、この子のせいだから」

そうだろうな、と思う。男の影の正体は、もうA子なのだとかってしまったのだから。壁紙の隅に染み込んだ、消しても消しても消えないA子の匂いを、まりっぺはどう思っているんだろう。私の前ではこうして気にするそぶりを見せるけど、もしかしたら、本当は。

それから、まりっぺはいったん収めた怒りをまた引き出すように、A子に向き直った。

「ほらほら、外で吸ってよね！ ここ、私の部屋なんだから」

rose 1

A子は不満げにぶつぶつ言いながらも、テーブルに放つてあった自分のタバコを取り上げながら立ち上がる。まりっぺの言うことはちゃんと聞くんだな、と思いながら、私もそれに倣って外に向かうことにした。まだ訊くことがあったから。